

『源氏物語』 若菜巻における「ありがたし」

——紫の上賛美をめぐって——

泉屋 咲 月

はじめに

若菜上巻における女三の宮の登場によって、紫の上は、相対化されると同時に登場人物として独自の価値を与えられた。深い内省と苦悩が描かれ、紫の上は独自性を持った理想的女主人公として定位されたのである。このような物語第二部における紫の上をたどると、「ありがたし」という賛美がくり返し用いられていることに気づく。

『源氏物語』において、「ありがたし」の用例は計一二八例（第一部五十三例、第二部三十九例、第三部三十六例）認められる。^①以前『源氏物語』における「ありがたし」について検討した際には、これらの一二八例を「〈賛美〉の用法」、「存在の困難さを示す用法」、「その他の用法」（「ありがたし」の「ほかにありえない」という意味が否定的な文脈で用いられる用法）に分類した。^②『源氏物語』においては、「賛美」の用法の例がもっとも多く、全体のおよそ八割を占める。

若菜上下巻で用いられる「ありがたし」は二十九例（若菜上巻十八例、若菜下巻十一例）で、第二部で用いられる計三十九例のうち七割以上にのぼる。物語第二部においてはもちろんのこと、若菜上下巻以外で「ありがたし」が十例以上用いられる巻はない。『源氏物語』全体を通して、若菜巻では「ありがたし」という表現が多く用いられているといつてよい。

次に、紫の上に対する「ありがたし」はどのような分布で用いられているのか見たい。『源氏物語』において、紫の上に対しては十三例「ありがたし」という表現が用いられ、これが源氏の二十六例に次いで多いことは、松木典子氏^③によって早くに指摘されている。この十三例のうち、九例が若菜上下巻に集中しており、これらはすべて〈賛美〉の用法である。若菜上下巻における〈賛美〉の用法の十九例のうち、紫の上に対して用いられるもののもっとも多い。

このように用例の分布を見ると、ほかの巻と比べ若菜上下巻では「ありがたし」という表現が多用されていることに加え、紫の上を賛美するためとりわけ多く用いられていることがわかる。

以下、紫の上に対する「ありがたし」という賛美をめぐる研究史をたどる。

北川真理氏⁴は、物語第二部で紫の上に対して用いられる「ありがたし」は、女三の宮降嫁などを経ながら、外面的理想美に加え、第一部では描かれなかった内面的理想性を備えていく紫の上を描くとした。そして、「ありがたし」が「ゆゆし」とともに用いられるようになることで、紫の上の理想性が「超人的」なものへと高められていると述べた。また、紫の上がその理想性を完成したことによって、源氏から精神的に離脱していくことを指摘した。

倉田実氏⁵は、「ありがたし」が若菜巻においては紫の上を称賛するための表現として機能しており、「紫の上を特徴づける」ものであると指摘した。また、紫の上について用いられる「…人」という表現のうち、若菜上巻における「おいらかなる人」は人格的美的要素を認めた賞賛であり、そこには「おいらか」な態度に徹する紫の上の苦悩が暗示されていたとした。それに対し、若菜下巻における「ありがたき人の御ありさま」や「いとかく具しぬる人」は「限らない賞賛の言葉だけで構成され」ていることを指摘した。紫の上の位地が相対化されていく物語の展開とは裏腹に、「…人」表現が紫の上の美質をいうのだし、手ばなしに賛美される紫の上の美質は、源氏の危惧する「空虚思想」とも関わって、その後の発病へとつながっていくのだと述べた。

松木典子氏⁶は、物語第二部において紫の上に多用される「ありがたし」を、女三の宮との「相對關係」において「ゆかり」としての正当性」に関わる理想性を示す表現であるとした。加えて、「ありがたし」という表現によって紫の上を「理想視」すること

で、源氏が紫の上の内面を理解することができなくなり両者は精神的に乖離していくのだと指摘し、それによって紫の上は発病したのだと述べた。

中川正美氏⁷は、紫の上が「個」の発見に至るまでの「孤愁を漂わせる姿」が、「ありがたし」や「はづかし」といった表現によって「精神的な理想美」として描かれているのだと述べた。

このように、物語第二部において「ありがたし」という表現が紫の上の特徴的に用いられていることは、早くから問題化され論じられてきた。その中で、紫の上を用いられる「ありがたし」は、苦悩しながらも望ましい対応をする紫の上を賛美し、内面的な理想性を語るものとされている。また、登場人物としての理想を達成した先に、源氏との精神的離別、発病と死があることも、すでに指摘されているところである。

物語第二部において、苦悩する紫の上が「ありがたし」と賛美されることで理想的な美質が描かれているということについて、反論の余地はない。物語第二部において、苦しい状況においても内面的美質を失わない紫の上が描かれ、「ありがたし」と賞賛される。苦悩と表裏一体の賛美であるからこそ、紫の上の内面的な理想性を語ることができるのだ。

ただ、なぜ「ありがたし」というひとつの表現をくり返し用いて紫の上を賛美するのかについては、未だ検討の余地が残されている。苦悩しつつも自制によって保たれる美德を賞賛することで内面的な理想性を描くならば、かならずしもひとつの表現がくりかえされる必要はない。むしろ、さまざまな表現を駆使して礼賛すべきであろう。紫の上を賛美するために、この表現がことさ

らに繰り返されるのはなぜであらうか。

先に述べたように、若菜巻では紫の上に対して「ありがたし」という賛美がとりわけ多く用いられている。本稿では、若菜巻において紫の上に対して用いられる「ありがたし」という賛美の特徴を明らかにし、この表現が選取られ、ことさらにくり返される意味について考える。

一 若菜上巻——源氏

若菜上巻において、紫の上を「ありがたし」とする用例は、源氏による三例（①、②、③）、明石の君による二例（④、⑤）の計五例である。本節では、源氏による「ありがたし」の用例（①、②、③）について検討する。

①はなやかに生ひ先遠く毎りにくきはひにて移ろひたまへるに、なまはしたなく思さるれど、つれなくのみもてなして、御渡りのほども、もろ心にはかなきこともし出でたまひて、いとらうたげなる御ありさまを、いとどありがたしと思ひきこえたまふ。
（若菜上④六三）

②さし並び目離れず見たてまつりたまへる年ごろよりも、対の上の御ありさまぞなほありがたく、我ながらも生ほしたてけりと思す。
（若菜上④七四）

③ことに触れて、心苦しき御気色の、下にはおのづから漏り

つつ見ゆるを事なく消ちたまへるも、ありがたくあはれに思さる。
（若菜上④九〇）

①は、女三の宮との新婚三日の夜の場面である。女三の宮の盛大な興入れが語られ、それに対して「なまはしたなく」思いながらも「つれなくのみもてなす」紫の上が「ありがたし」と賛美される。そうした紫の上の様子が語られた直後、女三の宮は源氏の視点から「小さく片なりにおはする」「いといはけなき気色」「ひたみに若びたまへり」（若菜上④六三）と語られる。そうした女三の宮の様子は、「かれはされて言ふかひありしを」（若菜上④六三）という紫の上の優位性の確認につながっていく。

用例②においても、直前で女三の宮の幼い様子が源氏によって「ことに恥ぢなどしたまはず、ただ児の面嫌ひせぬ心地して、心やすくうつくしきさましたまへり」（若菜上④七三）と捉えられており、用例①と同様に、女三の宮との対比の上で紫の上の優位性が確認されていることがわかる。また、この用例における源氏の「我ながらも生ほしたてけりと思す」という自らの紫の上養育に対する自負は、直前の「などてかくおいらかに生ほしたてたまひけむ」（若菜上④七三）という朱雀院の女三の宮養育に対する批判的な評価と対応している。

用例③は、紫の上と女三の宮対面の直前の場面である。ここでも、源氏によって女三の宮と紫の上が対比的に捉えられる。「あまりに何心もなき御ありさま」の女三の宮とは対照的に、「心苦しき御気色の、下にはおのづから漏りつつ見ゆるを事なく消ちたまへる」紫の上が、「ありがたし」と捉えられるのである。

松木氏の指摘する通り、若菜上巻における紫の上に対する「ありがたし」は、女三の宮との比較において紫の上の優位性が確認される際に用いられているといつてよい。

こののち、紫の上自身も女三の宮との対面を果たし、女三の宮の他愛なさを知り、こうして女三の宮の降嫁による衝撃はあたかも収束したかのごとく語られる（若菜④九二）。

ただ、ここで着目したいことは、源氏が女三の宮の幼さを批判的に捉ながら紫の上の美質を賞賛し、紫の上の優位性をくり返し確認しているということである。源氏が女三の宮との比較の中で「ありがたし」と賛美することで、源氏個人にとって妻として優れているのは紫の上であり、だからこそ紫の上がおとしめられることはないのだということが示される。しかしこのことの背後には、順当にいけば、紫の上は、源氏の妻としての第一の地位を失わざるを得ないことがある。だからこそ、源氏は、紫の上の地位を維持するために、「ありがたし」と紫の上を賛美し、同時に女三の宮を批判するのである。

源氏による「ありがたし」という賛美は、出自、身分ともに女三の宮が圧倒的に優位であるからこそ成り立つ、逆説的な賛美なのである。実のところ、女三の宮との対比の上で紫の上を「ありがたし」と賛美する源氏の意識の根底には、朱雀院鍾愛の皇女である女三の宮の絶対的ともいえる優位性があるといえよう。

二 若菜上巻——明石の君

続いて、明石の君が紫の上を「ありがたし」とする二例（④、

⑤）を見る。

④対の上の御心、おろかに思ひきこえさせたまふな。いとありがたくものしたまふ深き御気色を見れば、身にはこよなくまさりて長き御世にもあらなむ、とぞ思ひはべる。もとより、御身に添ひきこえさせむにつけても、つつましき身のほどにはべれば、譲りきこえそめはべりにしを、いとかうしものしたまはじとなむ、年ごろは、なほ世の常に思うたまへわたりはべりつる。

（若菜上④一二三）

⑤「そこにこそ、すこしものの心得てものしたまふめるを、いとよし、睦びかはして、この御後見をも同じ心にてものしたまへ」など、忍びやかにのたまふ。「のたまはせねど、いとありがたき御気色を見たてまつるまに、明け暮れの言ぐさに聞こえはべる。……

（若菜上④一三二）

これらの場面とともに、女御の若宮出産前に尼君によって明石女御に明石一族の素性が詳しく明かされたことを受けてのものである。後藤祥子氏は、これらの場面における明石の君の紫の上賛美に明石の君の「優越意識」を読み取る。三田村雅子氏は、「父によって秩序づけられ、父によって組み合わせられた養子・養女の空間であろうとする光源氏体制のはころび、裂け目」が展開されているとする。これらの先行研究に導かれつつ、紫の上を取り巻く状況と明石の君から紫の上に対する「ありがたし」の意味との関連を見ていきたい。

④は若宮誕生のあと、明石の君が明石女御に入道の願文を託し、訓戒する場面である。ここで着目したいのは、明石の君の「おろかに思ひきこえさせたまふな」という言である。この発言の背後には、自らの生い立ちを知った明石女御によって紫の上が「おろかに」思われることを想定する明石の君の意識がある。紫の上を「おろかに」思うことへの訓戒は、実は用例⑤にも深く関連している。

用例⑤は、④につづく場面である。この場面では、明石の君と明石女御のもとを訪れた源氏に入道の願文のことが語られ、源氏が紫の上を賛美し、それに対して明石の君が紫の上を「ありがたし」と評する。その際の源氏による紫の上賛美とは次のようなものである。

「今はかくいにしへのことをもとどり知りたまひぬれど、あなたの御心ばへをおろかに思しなすな。もとよりさるべき仲、え避らぬ睦びよりも、横さまの人のなげのあはれをもかけ、一言の心寄せあるは、おぼろけのことにもあらず。まして、ここになどさぶらひ馴れたまふを見る見るも、はじめの心ざし変らず、深くねむごろに思ひきこえたるを。……」

（若菜④一二九）

今度は、源氏によって紫の上を「おろかに」思うことが禁じられるのである。源氏にとっても、明石女御にその素性が詳細に知らされ、入道の願文が託されることは、女御が紫の上を「おろかに」思うことにつながるらしい。

この一連の場面における、明石の君と源氏からの紫の上賛美については、早くに秋山虔氏によって、「六条院における紫上の存在のむなしく不安な内実を逆に語りだすものとなっている」と指摘されている¹²。また、本橋裕美氏は、明石の君と源氏によって、紫の上を疎かにしないようにという訓戒が繰り返されることについて、「源氏と明石の君が、紫の上を疎外する可能性に思いあたり、同時に恐れて」いるために、「明石女御に紫の上を母として遇することを約束させる」のだと指摘している¹³。

ここで注意すべきは、悲願とその成就という大きな運命を共有する源氏と明石の君によって、紫の上が疎外されていく状況があったかも自明のことのように語られている点である。

本橋氏の指摘するように、源氏と明石の君が、悲願とその成就という明石一族をめぐる運命の上に明石女御を位置づける時、彼らの意識においては、その運命から紫の上が疎外されていくのだ。明石の君による紫の上に対する「ありがたし」(④、⑤)と、その間に配置される源氏による紫の上賛美は、そうした意識の表面化を描くと同時に、紫の上が疎外される状況避ける際の根拠として、紫の上の美質を示すために用いられているのである。

三 若菜下巻

若菜下巻における、紫の上に対する「ありがたし」の用例は計四例(用例⑥、⑦、⑧、⑨)で、それらはすべて源氏によるものである。まず、用例⑥、⑦を見たい。

⑥和琴に、大将も耳とどめたまへるに、なつかしく愛敬づきたる御爪音に、掻き返したる音のめづらしくいまめて、さらに、このわざとある上手どもの、おどろおどろしく掻きたてたる調べ調子に劣らずにぎはしく、大和琴にもかかる手ありけりと聞き驚かる。深き御労のほど、あらはに聞こえておもしろきに、大殿御心落ちゐて、いとありがたく思ひきこえたまふ。(中略) 琴は、なほ若き方なれど、習ひとりたまふ盛りなれば、たどたどしからず、いとよく物に響きあひて、優になりにける御琴の音かなと大将聞きたまふ。

(若菜下④一九〇)

⑦かやうの筋も、今は、また、おとなおとなしく、宮たちの御あつかひなどとりもちてしまふさまも、至らぬことなく、すべて何ごとにつけても、もどかしくたどたどしきことまじらず、ありがたき人の御ありさまなれば、いとかく具しぬる例もあなるをと、ゆゆしきまで思ひきこえたまふ。

(若菜下④二〇五)

用例⑥の場面では、夕霧の視点を介して、紫の上だけでなくほかの女君の演奏もそれぞれ描かれ、華麗な女樂の夜が語られる。そうした中で、源氏は紫の上の演奏に「深き御労」を感じ、「ありがたし」と評している。

用例⑦は女樂の翌日に源氏と紫の上が語り合う場面である。女三の宮の琴の上達をめぐってむつまじく語り合う二人が描かれる。そして、源氏は、女樂での紫の上の和琴の演奏のすばらしさ

を讀え、音楽の才能に加え、孫たちの世話など、さまざまな点においてすぐれた紫の上を「ありがたし」とする。

ここで、女樂に至るまでの紫の上を取り巻く状況がどのように描かれていたかを見ておきたい。

姫宮の御事は、帝、御心とどめて思ひきこえたまふ。おほかたの世にも、あまねくもてかしづかれたまふを、対の上の御勢ひにはえまさりたまはず。年月経るまに、御仲いとうるはしく睦びきこえかはしたまひて、いささか飽かぬことなく、隔ても見えたまはぬものから、……

(若菜下④一六六―一六七)

若菜下巻冒頭、女三の宮降嫁から四年後のことである。冷泉帝の讓位後に即位した今上帝に氣にかけられる女三の宮も、紫の上の「御勢ひ」にはかなわず、光源氏と紫の上の夫婦仲も安定していると語られる。また、

女御の君、ただ、こなたを、まことの御おやにもてなしきこえたまひて、御方は隠れ処の御後見にて、卑下しものしたまへるしもぞ、なかなか行先頼もしげにめでたかりける。

(若菜下④一六七)

と、紫の上が明石の女御から母として慕われていることが記される。直後の住吉詣に際しても、

女御殿、対の上は、一つに奉りたり。次の御車には、明石の御方、尼君忍びて乗りたまへり。(若菜下④一七〇)

とあり、同じく明石の女御の母として重んじられている様子が語られる。

しかし、前節で述べた通り、源氏と明石の君が、明石一族の運命の中に自分たちを位置づける時、そこには紫の上を疎外する意識が浮上する。住吉参詣に際し、明石女御の母として重んじられる紫の上が繰り返し語られることは、実際には紫の上がこの場から疎外されていることを際立たせる。

紫の上に対する厚遇が語られれば語られるほど、わざわざそう語らねばならない状況が背後にあることが見てくるのである。紫の上が重んじられることが語られる中で、紫の上自身は出家願望を口にするようになることから、このことは明らかであろう。状況的には苦しさが増していくにもかかわらず、紫の上の立場の不変が語られることで、かえって紫の上が変わらず重んじられていることの不自然さ、状況的困難さが強調されずにはおかないものである。

こののち、冷泉帝讓位、女三の宮の二品昇進によって、女三の宮の威勢は増し、今上帝と朱雀院の間こえをはばかる光源氏の渡りは「やうやう等しきやうになりゆく」(若菜下④一七七)ことが語られる。紫の上をとりまく状況がますます苦しくなる中で、やはり女三の宮の幼さが強調されていく。

姫宮のみぞ、同じさまに若くおほどきておはします。女御の

君は、今は、公さまに思ひ放ちきこえたまひて、この宮をばいと心苦しく、幼からむ御むすめのやうに、思ひはぐくみたてまつりたまふ。(若菜下④一七九)

かつて紫の上は源氏に養育されたが、源氏の「御むすめ」は、今は女三の宮であるらしい^①。これらのことを経て、朱雀院が女三の宮との対面を所望したことにより賀宴が計画され、それに先立って女樂が催される。女樂に際しては、女三の宮への琴の伝授のために「御暇聞こえたまひて、明け暮れ教へきこえたまふ。」(若菜下④一八二)と、源氏がよいよ夜離れがちになっていくさまが語られていた。

用例⑥、⑦の前後では、紫の上と女三の宮が源氏の視点から対比的に捉えられることはないが、女三の宮と比較し紫の上の優位性を確認する視点は依然としてある。たとえば、用例⑥では、源氏ではなく夕霧によって女三の宮の演奏と紫の上の演奏が対比的に捉えられている。女三の宮の演奏が批判されるわけではないにせよ、紫の上の演奏の方がより優れているものとされている。

こうした紫の上の優れた演奏に「深き御労」を見た源氏は、紫の上を「ありがたし」と賛美する。しかしここで留意したいのは、六条院で催された女樂は、いうまでもなく、朱雀院との対面にそなえて源氏が伝授した琴を演奏する女三の宮を中心に据えたものだっただろうということである。

第一節において述べたが、源氏から紫の上に対する「ありがたし」は、女三の宮降嫁により、紫の上が六条院における第一の女君の地位を失う中で、その実質的な位置づけは変わらないのだと

いうことを語る際に用いられていた。また、若菜上巻の明石の君による「ありがたし」は、明石一族の悲願成就の物語から疎外される紫の上をとめようとして用いられていたことは、第二節において述べたとおりである。

若菜上巻における「ありがたし」は、源氏が用いる場合も明石の君が用いる場合も、紫の上がそれまでの地位を失う、または状況から疎外されざるを得ないことが意識された時に、それをとめようとして用いられているのである。そして、用例⑥、⑦についても、これと同様のことがいえるのではなからうか。

女楽にいたるまでに、紫の上を取り巻く状況は苦しくなり、女三の宮の琴の演奏を中心とする女楽が催される。この点をふまえ、用例⑥、⑦で紫の上が「ありがたし」と賛美される意味を考えると、「ありがたし」とは、紫の上が六条院の中心的女君としての地位から外れていかざるを得ない状況に際して、紫の上の優位を語り、その位置づけを維持するために用いられているといえよう。次に、用例⑧について考える。

⑧さばかり、めざましと心おきたまへりし人を、今は、かくゆるして見えかはしなどしたまふも、女御の御ための真心なるあまりぞかしと思すに、いとありがたければ、「君こそは、さすがに限なきにはあらぬものから、人により事にしたがひ、いとよく二筋に心づかひはしたまひけれ。さらに、こころ見れど、御ありさまに似たる人はなかりけり。いと気色こそものしたまへ」とほほ笑みて聞こえたまふ。

(若菜下④二二一)

用例⑧は、用例⑦に続く場面である。女楽翌日の源氏と紫の上の語らいは、源氏の述懐を経て源氏による既往の女性評に発展する。用例⑧では、女性評の締めくくりとして、紫の上の理想的美質が「ありがたし」という賛美とともに提示されている。

この場面では、明石の女御のために明石の君を「ゆるし」、「二筋に心づかひ」する紫の上が賞賛されている。一方で、この直後の場面で女三の宮のもとに赴いた光源氏の視点から描写される、女三の宮の様子は「我に心おく人やあらん、とも思したらず、いといたく若びて、ひとへに御琴に心入れておはす」(若菜④二一)という紫の上とは対照的なものである。

また、用例⑧について考える時、直前の場面での源氏の述懐(若菜下④二〇六―二〇七)と、それを受けて紫の上が出家を願っていることには注意したい。源氏は、紫の上の境遇について、女三の宮降嫁は多少苦しいかもしれないが、それによって自分の愛情は勝ったのだから非常に恵まれたものであるとする。それに対し、紫の上は、「のたまふやうに、ものはかなき身には過ぎにたるよそのおぼえはあらめど、心にたへぬもの嘆かしさのみうち添ふや、さはみづからの祈りなりける」(若菜下④二〇七)と応じ、出家を申し出る。

若菜下巻冒頭では、紫の上に対する厚遇が語られる中、源氏に出家を申し出る紫の上が描かれていた。それに対し、当該場面(若菜下④二〇七)では、紫の上の境涯は恵まれたものであるという源氏の主張を受けて、紫の上が出家の願望を訴えるのである。その後の女性評の締めくくりに、「ありがたし」によって紫の上

理想的な女性として焦点化されることには、これまで同様の構図が見て取れる。つまり、用例⑧における「ありがたし」という賛美と、それに導かれる源氏の紫の上評もまた、既往の女性評において紫の上を理想的女性として位置づけ、紫の上の位地を維持するために用いられているのである。

最後に、用例⑨を見る。

⑨ 仏神にもこの御心ばせのありがたき罪軽きさまを申しあき
らめさせたまふ。
(若菜下④二二六)

用例⑨の場合、「ありがたし」が「罪軽し」にかかっていると解することもできるが、本稿では紫の上に対する「ありがたし」の用例として考える。用例⑧の直後に発病した紫の上は、三月に二条院に移される。若宮を見て、自身の生い先の短さを嘆く紫の上を源氏が諫め、仏神に祈願する。この用例では、言うまでもなく、紫の上は六条院における妻としての立場ではなく生命、すなわち存在そのものが危ぶまれているといえよう。源氏は、紫の上の存在を維持するために仏神に祈願する際に「ありがたし」という賛美を用いるのであった。

このように、若菜下巻における源氏から紫の上に対する「ありがたし」という賛美もまた、その美質や理想性を確認する行為である。同時に、それを根拠に、危ぶまれる紫の上の立場や存在そのものを引きとめようとする。また、若菜下巻においても、女三の宮の幼さや未熟さがくり返し強調されることで、紫の上の美質と女三の宮に対する優位性が提示される。そして、「ありがたし」

によって確認される美質や理想性、ほかの女君に対する優位性を根拠に、六条院の中心的女君は依然として紫の上である、と物語は語ろうとするのであった。

四 存在の困難さを示す用法

ここで、「ありがたし」という語の意味をあらためて確かめておきたい。「ありがたし」とは、本来は存在しがたいことを意味する語である。たとえば、「暇ありがたし」などのように用いられ、この場合には賛美の意味は持たない。「ありがたし」とは、「動詞「あり」に補助形容詞「かたし」が接したもの」で、元来は「存在しがたいことのさま」を示す表現であり、場合によっては生きていることが困難であるという意味にもなる。¹⁶「有ることがまれであって、それゆえ価値のあることのさま。珍しく貴重であるさま」や「例がないと思われるほど、ありさまが立派であるさま」という賛美表現としての意味は、「存在しがたい」というもとの意味から派生したものである。

以前拙稿で述べたように、『源氏物語』においては賛美表現として用いられる例が圧倒的に多く、存在の困難さを示す用法の「ありがたし」は二十七例に過ぎない。¹⁸また、本稿で問題にしている紫の上に対して用いられる用例は、すべて賛美の意味を含む用法である。しかしその分布を見ると、第二部で用いられる「ありがたし」三十九例のうち、存在の困難さを示す用法は十例（約二十六％）で、第一部（五十三例中七例、約十三％）、第三部（三十六例中五例、約十四％）と比較して、その割合は高いといえる。

加えて、第二部における存在の困難さを示す用法十例のうち、

九例が若菜巻に集中している（若菜上巻四例、若菜下巻五例）。

ほかの用法も含めて考えてみても、若菜巻における存在の困難さを示す用法は、物語第二部に見られる「ありがたし」（三十九例）の約二十三日を占める。巻別にみると、若菜巻以外の巻では存在の困難さを示す用法は一、二例しか用いられず、『源氏物語』全体を通して見ても、若菜上下巻における用例数は圧倒的に多い。

また、若菜巻における存在の困難さを示す用法には、「ありがたし」本来の意味を想起させるほか、次の二例のように紫の上賛美に関わるものもある。

A みなおのおの得たる方ありて、わが後見におもひ、まめまめしく選び思はむには、ありがたきわざになむ。ただまことに心の癖なくよきことは、この対の上をのみなむ、これをぞおいらかなる人と言ふべかりける、となむ思ひはべる。よしとて、また、あまりひたたけて頼もしげなきも、いと口惜しや」とばかりのたまふに、かたへの人や思ひやられぬかし。

（若菜上④一三〇）

B かやうのことを、大将の君も、げにこそありがたき世なりけれ、紫の御用意、気色の、こころの年経ぬれど、ともかくも漏り出で、見え聞こえたるところなく、しづやかなるを本として、さすがに心うつくしう、人をも消たず身をもやむことなく、心にくくもてなしそへたまへることと、見し面影も忘れがたくのみなむ思ひ出でられける。

（若菜上④一三四）

用例Aは、明石の君から紫の上に対する「ありがたし」の用例⑤の直前の場面である。源氏は、紫の上のことを「おろかに思しなすな」（若菜上④一二九）と明石女御に訓戒した後、妻として理想的な人を選び取ることの困難さを「ありがたし」によって語り、紫の上を賛美していくのである。

用例Bでは、夕霧が女三の宮の幼いありようを批判的に捉える中で、理想的な女性の存在しがたさが「ありがたし」と語られ、ふたたび紫の上が賛美されていく。この二つの用例では、存在の困難さを示す用法によって、いったん理想的な妻はめったにないと否定することで、紫の上の美質や理想性を強調していることがわかる。

若菜巻では、存在の困難さを示す「ありがたし」が頻出する中に、紫の上賛美の「ありがたし」が繰り返して配置されていることになる。賛美表現として用いられることが多い「ありがたし」が、本来は「ほとんどない」「めったにありえない」という、存在しがたさを意味する語であることを読者に喚起しているのではなからうか。存在の困難さを示す「ありがたし」を多用し、「ありがたし」本来の意味を読者に喚起する中で紫の上に対して「ありがたし」という賛美をくり返すことで、紫の上の美質の希少性をより強調しているのではないだろうか。

さらにいえば、六条院における立場、ひいては生命においても、紫の上の存在そのものが困難であることを暗に象徴しているかのようでもある。存在し続けることが困難であるからこそ、紫の上は、六条院からの退去、さらには人生からの退去を強いられてい

くのではないだろうか。「ありがたし」という賛美は、紫の上の稀有なあり方を象徴するものとして見る事ができる。だからこそ、紫の上を賛美するにあたり「ありがたし」という表現が選び取られたのであろう。

五 六条院の綻びへ

これまで見てきたように、女三の宮の登場、そして明石一族の悲願成就など、若菜上下巻を取り巻く状況は紫の上の優位性をことごとく脅かす。紫の上の地位や優位性、存在が危ぶまれたり、状況から疎外されたりしそうになるたび、「ありがたし」と賛美することによって美質や理想性を確認し、それを根拠に紫の上の立場を維持しようとしてきた。

誰かが紫の上を「ありがたし」と評する時、その背後にはかならず、紫の上の優位性もしくは何らかの立場が失われたり、状況から疎外されたりする可能性が想定または示唆されている。その中で、なんとか紫の上を変わらぬ位置にとどめようとして用いられるのが「ありがたし」という賛美である。

若菜巻における紫の上に対する「ありがたし」は、単なる常套的な賛美の枠組みを超えて、紫の上のたぐいまれな美質を強調し、それを根拠に、それまでの立場を維持するための表現として用いられている。しかし皮肉にも、「ありがたし」と賛美されることで紫の上の美質や優位性が強調されるたび、もはや紫の上の絶対性を自明のこととして語れなくなってしまうことが浮き彫りになる。

そして、紫の上の優位性が失われていくにもかかわらず、その地位が維持されていくことは紫の上の発病へとつながり、紫の上の発病は結果として、その後の女三の宮の密通を引き起こしている。

また、次に引用した場面を見ると、女三の宮降嫁後も紫の上が厚遇され女三の宮に劣勢を強いていることが、柏木の女三の宮に対する憐憫を誘い、柏木の女三の宮に対する情念を駆り立てていることがわかる。

・「対の上の御けはひには、なほ屈されたまひてなむ」と、世人もまねび伝ふるを聞きては、かたじけなくとも、さるものは思はせてまつらざらまし、げにたぐひなき御身にこそあたらずらめ、と常にこの小侍従といふ御乳主をも、言ひはげまして、世の中定めなきを、大殿の君もとより本意ありて思しおきてたる方におもむきたまはばとたゆみなく思ひ歩きけり。
(若菜上④ 一三六)

・「院には、なほこの対にのみものせさせたまふなめりな。かの御おぼえのこととなるなめりかし。この宮いかに思すらん。帝の並びなくならはしたてまつりたまへるに、さしもあらで屈したまひにたらむこそ心苦しけれ」
(若菜上④ 一四六)

・「……いといとほしげなるをりをりあなるをや。さるは、世におしなべたらぬ人の御おぼえを。ありがたきわざなりや」といとはしがる。
(若菜上④ 一四六)

柏木は、女三の宮を冷遇する源氏を批判し、恋情を燃やし続け、最終的には密通を犯してしまうこととなる。¹⁹⁾

注意したいのは、柏木が源氏の女三の宮に対する冷遇を「ありがたきわざ」と表現することである。この一例は、「ありがたし」の「めつたにありえない」という意味が否定的な文脈で用いられる用例で、《賛美》の用法、存在の困難さを示す用法のどちらにも該当しない。この用法の用例は、第一部では認められず、第二部では当該箇所の一例のみ、第三部でも四例しか認められない。²⁰⁾加えて、柏木が女三の宮との密会の機会の希少性を表す際に、「ありがたし」を用いることにも着目される。

・「今はよし。過ぎにし方をば聞こえじや。ただ、かくありがたきものの隙に、け近きほどにて、この心の中に思ふことはしすこし聞こえさせつべくたばかりたまへ。おほけなき心は、すべて、よし見たまへ、いと恐ろしければ、思ひ離れてはべり」とのたまへば、……
(若菜下④二二〇)

・明けゆくけしきなるに、出でむ方なくなかなかなり。「いかかはしはるべき。いみじく憎ませたまへば、また聞こえさせむこともありがたきを、ただ、一言御声を聞かせたまへ」と、よろづに聞こえ悩ますも、うるさくわびしくて、もののさらに言はれたまはねば、……
(若菜下④二二七)

この二例は、存在の困難さを示す用法である。このように、若

菜巻で柏木が用いる「ありがたし」(若菜上④一四六、若菜下④二二〇、若菜下④二二七)は、すべて女三の宮との密通に深く関連した場面で用いられているのである。

六条院において、紫の上を中心的な女君に据えた状況を保とうとすることは、柏木の情念を掻き立てる。そしてそればかりでなく、紫の上を病に至らしめ、結果的には柏木と女三の宮の密通を導く。同時に、女三の宮の密通について考える際、紫の上の美質を確認するたびに引き合いに出される女三の宮の幼さが、密通を引き起こす要因のひとつになっていることは看過できない。²¹⁾紫の上を中心的な女君に据えた、それまでの六条院の均衡を保とうとすることが、かえって六条院の綻びを招いてしまったわけである。

おわりに

物語第二部において、女三の宮の登場によって格下げされた紫の上は、自制によって美徳を保持することで独自の理想性を獲得した。「ありがたし」という表現によつて賛美されているのも、こうした理想的美質である。しかしながら、若菜巻における紫の上に対する「ありがたし」をたどると、紫の上が優位性を喪失する、あるいは何かから疎外されざるを得ない状況が見えてくる。

それに抗うようにして、女三の宮批判と紫の上礼賛を繰り返し、紫の上の美質を確認する行為こそ、「ありがたし」という紫の上の美質の実態である。これらは、「ありがたし」本来の意味、存在の困難さを示す用法が頻出する中にちりばめられることによつて、紫の上の美質の希少性をさらに強調している。

けれども、紫の上の立場を維持し六条院の均衡を保持しようとするのが、かえって六条院の結びへと通じてしまふのであった。若菜巻における紫の上に対する「ありがたし」と、存在の困難さを示す「ありがたし」は、女三の宮降嫁を契機として均衡を失っていく六条院と、紫の上を中心に据えることでそれに抗おうとするもかえって結びを招いてしまふ、若菜巻の展開を象る表現としても見る事ができよう。

こうした若菜巻の展開に加え、紫の上自身の稀有なあり方、そして紫の上を源氏の対として中心に据えた六条院の稀有なあり方を象徴するものとして、「ありがたし」という表現が選び取られたのではなからうか。

注

- (1) 本稿において引用する『源氏物語』本文は、新編日本古典文学全集（小学館）による。また、用例数もこれに基づく。表記は、「巻名、巻数、頁数」とした。
- (2) 拙稿『源氏物語』における「ありがたし」（『立教大学日本文学』第一一五号、二〇一六年一月）。
- (3) 松木典子「紫の上をめぐる「ありがたし」について―発病にいたるまでの階梯を理解するために―」（『平安朝文学研究』復刊第五号、一九九六年十二月）。
- (4) 北川真理「紫の上の理想性―形容語をめぐる―」（『学芸国語国文学』第十三号、一九七七年二月）。
- (5) 倉田実「紫の上と「三人」表現―物語第二部における―」（『源氏物語の探究』第十五輯、風間書房、一九九〇年）。
- (6) 注3に同じ。
- (7) 中川正美「紫上の孤愁―「個」の発見―」（『源氏物語のこと

ばと人物」青簡舎、二〇一三年。初出は、「紫上の孤愁―源氏物語における「個」の発見―」（『兵庫女子短期大学研究集録』第二三集（一九九〇年三月））。

- (8) 注3に同じ。
- (9) 女三の宮との対面のと、紫の上は女三の宮を「いと幼げに心やすく」（若菜上④九〇）と捉えている。
- (10) 後藤祥子「若菜以後の紫の上」（『源氏物語の史的空間』東京大学出版会、一九八六年。初出は、『源氏物語研究 第七号』（一九七九年十二月、原稿同じ））。
- (11) 三田村雅子「明石からの手紙」（『源氏物語―物語空間を読む』ちくま新書、一九九七年）。
- (12) 秋山虔「源氏物語の方法に関する断章―「若菜」巻における明石物語・続―」（『古代文学論叢第二輯 源氏物語とその周辺』紫式部学会編、武蔵野書院、一九九九年）。
- (13) 本橋裕美「母を看取る后―『源氏物語』紫の上の臨終と明石の中宮―」（『むらさき』第五二輯、二〇一五年十二月）。
- (14) 三村友希「幼さをめぐる表現と論理」（『姫君たちの源氏物語―二人の紫の上』翰林書房、二〇〇八年。初出は『源氏物語と日本大学研究の現在―身体・ことば・ジェンダー フェリス女学院大学日本文学国際会議』（二〇〇四年三月、原題同じ））。
- (15) 中野幸彦・岡見正雄・板倉篤義編『角川古語大辞典』（角川書店、一九八二年）。
- (16) 外村南都子「ありがたし」（『国文学』三六巻六号、一九九一年五月）。外村氏は、「あり」という語が世にある、生存するという意味でも用いられることから、「ありがたし」は、場合によって、生きることが困難だという意味にもなる」と述べた。
- (17) 注15に同じ。
- (18) 注2に同じ。

(19) 曾根誠一「女三宮―悲劇のヒロイン」(『国文学 解釈と鑑賞』六十九巻八号、二〇〇四年八月)。曾根氏は、源氏が「女三の宮の幼さ故に世間体を保つ処遇はしながら、紫の上を重んずる姿勢を優先」したことが、「柏木の邪恋を継続させ、柏木からも批判・相対化」されたのだとした。そして宮「女三の宮」の密通の悲劇は、光源氏側に根本的な責任が求められるべき事案」であるとした。

(20) 以前、拙稿(注2に掲出)において「その他の用法」として分類した用法である。その際、当該箇所は「その他の用法」には分類していなかったが、あらためて検討した結果、第二部で一例(当該箇所)と第三部で一例、計二例を「その他の用法」(「ありがたし」の「ほかにありえない」という意味が否定的な文脈で用いられる用法)として認定した。

(21) 森一郎「女三の宮創造―幼稚な人柄の意味するもの―」(『甲南国文』十二号、一九六五年二月)、野村精一「女三宮」(『国文学 解釈と鑑賞』一九七一年五月)、武者小路辰子「女三の宮像―幼さへの設問―」(『日本文学』一九七四年十月)、山田利博「負性を帯びた主人公―女三の宮の造型をめぐる―」(『源氏物語と平安文学』第三集、一九九三年五月)。

※本稿は、中古文学会平成二十八年度春季大会(二〇一六・五・二十二、早稲田大学)での口頭発表に基づく。ご教示を賜りました諸先生方に厚く御礼申し上げます。なお、本稿は二〇一六年度立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)の研究成果の一部である。

(いずみやさつき 大学院博士後期課程)